

社会活動を行う犯罪被害者遺族の心的変容プロセス

— 社会活動を終えようとする遺族に着目して —

太田美里

(広島大学大学院教育学研究科)

1. 目的

社会活動を行う犯罪被害者遺族 (以下、遺族) は、活動を通して事件に伴う抑うつから脱する。しかし、その背景には事件の否定が存在することが指摘 (野田, 2014) されており、遺族の永続的な変容プロセスを検討する必要がある。したがって、本研究は、活動開始時から活動の終わりを迎えようとするまでの遺族の心的変容プロセスを、縦断的な面接調査によって具体的に明らかにすることを目的とする。

2. 方法

対象者と手続き 第1回目の面接調査は、2015年9月～10月、第2回目は2018年2月～5月であり、社会活動を行う遺族10名に半構造化面接を行った。分析対象者は、活動を終えようとしていると語った60～70代の3名の遺族 (女性) とした。

面接内容 ①被害の概要、②活動を行う自身について、③今後の展望等について尋ねた。

分析の手続き 分析は氏家・高濱 (1994) のマッピング法を採用した。

3. 結果

分析の結果、4個のカテゴリが生成された。遺族の心的変容プロセスは、【遺族を取り巻く社会】の影響を受けながら、【社会活動を行う遺族としての心情】、【故人に対する心情】、【遺族の対人関係の在り方】の変容が各々循環的に進むと共に、互いに影響を及ぼし合っ

て生じた (Figure 1., Figure 2.)。

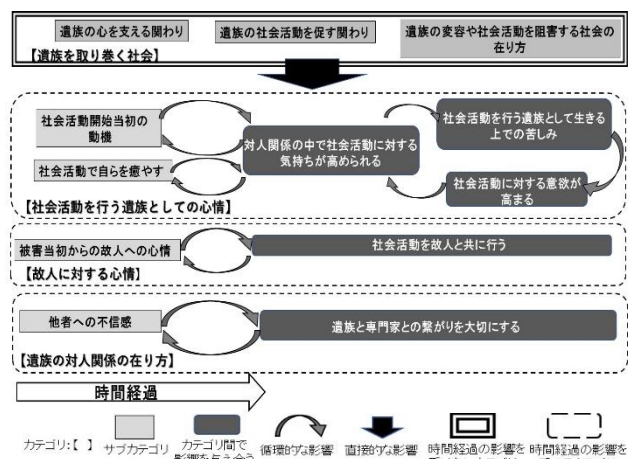


Figure 1. 故人と共に活動を行うプロセス

族を取り巻く社会】の影響により、講演対象者に故人の面影を重ねるだけでなく、社会的なレベルで活動に使命感を感じるという【社会活動を行う遺族としての心情】の変化が生じた。また、【故人に対する心情】では、故人に導かれて活動を共にする感覚を持った。さらに、他者へ不信感を抱いていた遺族が、他の遺族や専門家との繋がりを大切にする等【遺族の対人関係の在り方】も変容した。(2) **故人と共に個人としての生活を取り戻すプロセス** 遺族は、体力が衰える等の影響で、活動を終えたいという気持ちが生じるが、生きがいがなくなる等活動を終える上での葛藤を経験した。その最中、遺族は自身の活動を振り返り、達成感を得る等【社会活動を行う遺族としての心情】の変化を感じた。また、【故人に対する心情】では、活動以外の生活にも自然に内在化された故人を感じた。さらに、遺族は活動の終わりを受容するという【社会活動を行う遺族としての心情】の変化により、遺族ではなく個人として友人との生活を楽しむ等、【遺族の対人関係の在り方】も変容した。

4. 考察

活動の終わりは、活動を介さずに事件と向き合い、他者と繋がる必要性を迫られるという点で遺族の生涯発達の危機となり得る。しかし、活動を通し、故人との絆や他者への信頼感を築くこと、そして事件で奪われた自己コントロール感 (Joseph, 2011) を活動への達成感によって取り戻すことが、個人として生きる遺族を支えると考えられる。

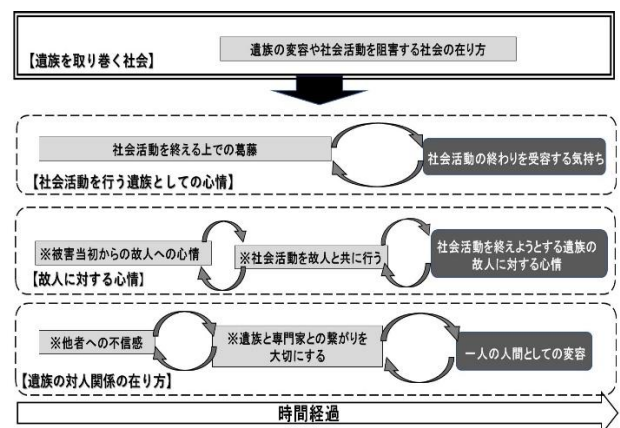


Figure 2. 故人と共に個人としての生活を取り戻すプロセス